

地球と宇宙の文化心理学

第4回 解題：「第二の皮膚」(2)

土元哲平



日常の散文的時間のなかに無数のマイクロな事件のかたちで偏在している記号の生成体験によってその基盤を与えられながら、しかしその等し並の偏在性のなかへと溶解されてしまうことを飽くまで拒み、突出した特権的瞬間にふさわしい燦然たる輝きを主張してやまない際立った記号の現在としての、詩。詩がもし存在するとしたら、それはこの、言葉のわけのわからなさに対して過剰に研ぎ澄まされた倫理的感受性によってのみ現実化されうるべきものというべきだろう。(松浦, 1984; p.255-256)

「私＝風景」の倫理

「第二の皮膚」の詩の中で私が描こうとしたのは、月という「皮膚」あるいはその表面としての「肌理」が侵食されるという〈事件性〉であった。これを「事件」とあえて呼んでいるのは、月が、世界各国の人びとに同時的にまなざされる、審美的で神聖な風景であるにも関わらず、主要宇宙開発国という権威的な主体がその風景を改変し、そこに「人が滞在する」という破壊性が潜んでいるからだ。連載第1回で述べたように、特定の「場所」や「風景」は、深い存在論的次元において自己を形作っている。その最たるもの、そして地球で生きる人類ともっとも切り離せない風景こそ、月なのである。

この詩では、「風景」のその先にある自己の存在の輪郭——すなわち、風景とともにある私という存在——についても思考している。私が地球から月という風景を眺めているとき、その先に広がるものは「無」なのだろうか。それとも、そこにも「私」がいるのだろうか。「私」というものが自己と世界が相互浸透しあうことで成立しているのだとすれば、月はもっとも離れた「風景＝私」であり、その外部に広がるものは、私にとっては「無」ではないだろうか。これが詩の中で描かれた暫定的な答えであった。

というのも、私はどうあがいても地球に生きており、月のさらに先にある天体を、実感を伴う存在として経験することはできない。太陽系のいくつかの惑星は確かに存在している。しかし、それらが失われたとしても、私はそれを喪失として感じることはできるだろうか。太陽や火星、あるいは冬の到来を告げるオリオン座の星々が失われるという事態は想像を絶する危機であるが、それらは、改変されることさえ思考の射程に入らない。一方の月は、その表面の肌理（きめ）を風景の一部としてみなすことができるほどに、改変可能な脆さを持つからこそ、私の風景となり得る。風景の喪失の危機が現実化されたとき、月は「私」になったのかもしれない。だとすれば、私にとって現に立ち現れている風景とは、倫理的想像力の届く範囲なのではないだろうか。

この詩において描かれる「金属の影」は、月を探査・開拓しようとする諸技術を象徴している。また、「アリのように群がる」という表現は、それらの技術が月に存在するとされる水資源へと直線的に向かっていく様を喩えたものである。月の南極域に位置する永久影クレーターには水氷の存在が確認されており、水は人類の生存に不可欠であるだけでなく、電気分解によって水素および酸素を生成できることから、将来的な宇宙探査、とりわけ火星探査を支える戦略的資源でもある。しかしながら、月面開発においては人類の生存確保が第一義的課題として前景化される一方で、「地球からみた風景」に対する倫理的態度については、ほとんど顧みられていない。

人類が再び月へ向かうという事実は、必ずや多様な領域におけるインスピレーションの源泉となるだろう。しかし同時に、その活動が、風景に対する特権的、あるいは機械的な外部からの介入、さらには暴力ともなり得る可能性を孕んでいるということを自覚する必要がある。月は単なる物理的天体ではなく、私たちの身体感覚や精神と深く結びついてきた。そうであるならば、宇宙開発という人類の生存域の拡張を志向する営みは、他方で、

私たち自身の存在の輪郭や境界を揺るがす行為でもあるためだ。月という風景が非可逆的に改変されることを想像することは、私たちが自明視してきた「地球らしさ」——月なしには成立しえない文化化された自然——を問い直す契機となる。

二重性と詩的運動

「第二の皮膚」の詩の主要な特徴の一つは、その二重性にある。そこでは、月と地球という遠く隔たった場所を同時に経験する空間的二重性、「未来の風景が今の私を懐かしむ」と同時に「未来の私が今の風景を懐かしむ」という自己と風景の二重性、さらには時間の二重性が交錯している。「未来の風景が今の私を懐かしむ」とは、詩を詠んでいる現在の「私＝風景」が、すでに改変された未来の「私＝風景」を想像し、その未来の視点から現在を生きる「風景＝私」へと郷愁を向けるという、反転的な動きを指している。この想像は、月に対してのみ向けられたものではない。私が小学生の頃、湯船に浸かりながら「十年後には、今という時間も一瞬に感じられるのだろうか」とふと疑問を抱いた経験に由来している。当時の私は、その時間への問いからタイムマシンを作りたいという夢を抱き、やがて宇宙を研究したいと願うようになった。未来から現在をまなざすというこの動きが、月の未来から現在を眺める姿勢へと結びついたのは、偶然ではない。「不可能」なものを重ね合わせる現実の矛盾を引き受け、結びつけようとするところにこそ、人間の詩的な意味は生まれるのであり、その「不可能性」を抱え続けることこそが、詩として現実を生成し続ける動きなのである。

Bruner(2003)は、「二重の景観 (dual landscape)」という概念を提示し、人が出来事を理解する際には「行為の景観 (landscape of action)」と「意識の景観 (landscape of consciousness)」という二つの層が同時に働いていることを指摘した。すなわち、地球・今・自己としての現実としての「行為の景観」を生きると同時に、月・未来・風景としての想像による「意識の景観」を生きているのである。このとき、現実と想像はいずれも主体にとっては、実際に生きられた出来事としてのアクチュアルな経験なのである。詩の一つの特徴として、現実と想像のあいだを主体がどのように生きているのかをラディカルに示すことがある。現実中存在するもの (A) と、想像上の別のもの (B) とを結びつける行為——すなわち「A としての B」あるいは「B である A」を生み出すメタファー的な運動——が、身体を前進させる感覚 (carry forward; Gendlin, 1995) を生み出すとき、それは「詩的運動」と呼びうる。詩的運動とは、主体によって感じられる複数の経験の断片を意図的に引き出し、それらを重ね合わせることによって、新たな意味感覚を生成する総合の行為であるといえる。

ここで重要なのは、現実の「この経験 (A)」と想像の「あの経験 (B)」とのあいだに生じるギャップである。現実と想像は本来的に異質であり、いかに想像を現実になら近づけようとしても、そのリアリティを完全に再現することはできない。たとえば、月に立つ自分自身を、地球上で経験することは不可能であり、未来と現在も同時に経験できない。しかし、この異質性こそが、「今・ここにはないもの」へと向かい続けようとする「あがき」を生む。その到達不可能性を受け、それでもなお近づこうとする運動のうちに、詩の創造性がある。

おわりに

本稿では、前回に引き続き、連載第2回の詩「第二の皮膚」の解題を行った。詩を解説することは、本来、鑑賞を読み手に委ねるという詩のあり方と緊張関係にある行為でもある。しかし本稿では、詩的創造／想像の過程をあえて言語化し、辿り直すことによって、当時私の中に立ち現れていた「詩的な世界」の輪郭を描き出すことを試みた。冒頭の作品は、同じ詩を題材として制作したものである。素材としては、スマートフォンの基盤部分（かつて私の「手」とともにあったもの）、月の象徴としての革の銀面（表面）を漉いたもの、そして手元にあった溶岩（アクアリウム用）などをブリコラージュしている。「地球、月という日常性」の感覚を少しでも喚起できれば幸いである。

引用文献

Bruner, J. S. (2003). *Making stories: Law, literature, life*. Harvard University Press. (邦訳『ストーリーの心理学：法・文学・生をむすぶ』)

Gendlin, E. T. (1995) Crossing and dipping: Some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines*, 5, 547-560.

松浦寿輝. (1984) 無音の声の物語（3 詩はいかにして可能か）, 現代思想 1984年12月号, p.255-265.